

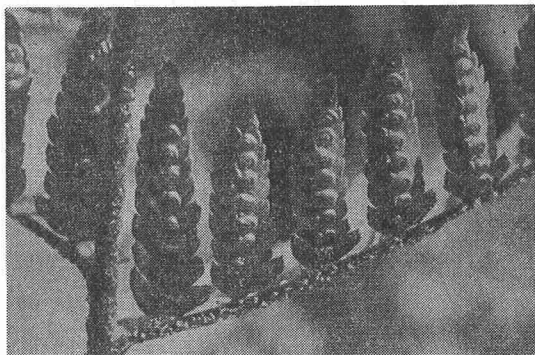
広報

— 6 卷 4 号 —

昭和 49 年 4 月 10 日発行

目 次

新生生の諸君へ	茅 誠 司……(2)
沖縄での気象観測	岸 保 勸三郎……(3)
論文洪水	佐々木 亘……(4)
仏語と友達になる話	高 橋 武 美……(5)
坂田さんと共に 40 年	立 見 辰 雄……(6)
神谷さんの退職にあたって	桑 原 五 郎……(7)
私の読んだ本(11)	平 川 浩 正……(8)
《学部消息》	(9~16)



ベニシダ *Dryopteris erythrosora* (Eat.) O. Kuntze

三四郎池のまわりなどでベニシダが萌えだしている。わらび巻きという羊歯植物に普通の芽生えが、名のように紅色を帯びて美しい。これは早春の芽生えや新葉で著しく、夏頃には目立たないので、別名をヤヨイワラビとも呼ばれ、素人目に派手さはないが古くから茶人に愛好されており、春の代表的な植物の一つといえる。写真のように、ほぼ円形をした胞子囊群が芽生えの時から小羽片の裏側に二列に並んでつき、それを被う苞膜は特に濃い紅色となるのが種の特徴である。構内はもとより都内や近郊の公園、林などで普通にみられるが、種の全分布域をみると生態的にはシイの多い常緑樹林が本来の住み場所といえる。おそらく東京の自然林もこのような林だったのだろう。

(大橋広好: 植物)

新 入 生 の 諸 君 へ

茅 誠 司 (物理・名誉教授)

1. 大学は異なった意見が共存する場であること。

こんなことは大学の本質として極めて初歩的なことで、改めて言う必要がないかも知れない。しかし共存するということは、中々六ヶ敷いことで、実際には多くの大学で異なる意見の群の間に闘争が起ったり極端な場合には暴力が行使されたりする。これは極めて悲しむべきことで、大学の本質を破壊するものと言わねばならない。新入生の諸君に望むことは、大学は学問研究の場であり、従って異なる意見の共存を認め、暴力による闘争の場にならないよう守って頂きたいということである。

2. 大学を自分の大学と考えること。

入学してはなかなか自分の大学という実感は湧かないかもしれない。しかしいつまでもそうであっては困る。例えば大学内の到るところに様々な宣伝ビラが貼ってあって、外から校内に入った人はその雑然とした見苦しさに眉をひそめることが多い。諸君は、これが自分の住む家であった場合はこれを整理し規正することを考えるに違いない。しかしこんなに汚く貼りめぐらされていても何故大学当局はそれに手を打たないのかと大学の手ぬるさを唯頭の中でせめるくらいであって、なかなか行動を起さないのが普通である。

諸君に私の要求するのは、大学当局をせめる前に、自分達で何かできないものかを考えて、それを実行に移して欲しいことである。それがやがては大学を自己と考え、連帯責任感を持って大学の本質を守りぬくことにつながって行くことと思う。

3. 大学を人間的接触の場としよう。

大都會の中の大きい大学は、連続する講演の会場みたいになり勝ちである。特に法学部とか経済学部などでは数百名の学生の前で講義が行なわれ、それに対する質問とか討論を十分行なう機会が少ないので、宛もテレビで講義をきくのと違いはないようにも思われる。なまの講義の特長は、質問、討論を通じて講義の内容により深い理解が得られると同時に、先生と学生同志の間に人間的な触れあいが生じることであろう。よき師、よき友を得るか否かはその人生を豊かなものにするか否かの鍵であ

る。

この意味で人数の限られた学生の間を持たれるセミナーを通じて先生との人間的触れ合いを作ることは極めて大切である。学生諸君は、より積極的にセミナーの開催を要求されこれに参加されることを希望する。

4. 学問に没頭せよ。

私が大学を卒業したのは1923年だったが、それは丁度私の専攻する物理学が古典物理学から量子物理学へ脱皮する直前であった。分子や原子の大いさの空間(1億分の1センチ)ではニュートンの物理学のみでは説明しきれない多くの現象が山積していた。これが1925・6年になってシュレーディンガー、ハイゼンベルクの2人によって見事に解決されてしまったが、私共は当時学生であったがこの脱皮直前の物理学の様相に魅せられて、夢中だった。それから50年を経た今日もその頃の私共の勉強に没頭した姿が忘れられないし、またその頃のわれわれを幸福だと思っていた。諸君にも是非そのような思い出を持って貰いたいと思う。

5. 個の充実について。

これからの社会人は生涯教育を通じて一生それぞれの個の充実に努めなければならないと説かれている。大学へ入学当初はこの個の充実のために一般教養課程が当てられ、本郷に来る前に駒場でその講義をきくことになっている。しかし個の充実とは、ただ講義だけで達成されるものではない。勿論講義をきいてそれを消化することは大切であるが、個というのは、ことに所して自らの意見を持つことのできる能力と、その自己の意見に従って行動する強固な意志のあることを意味する。したがって知識は必要ではあるがそれだけでは十分ではない。論語は、これを書いた孔子が目下中国で批判を受けているが、私はその中の「君子和而不同，小人同而不和」という句を座右の銘としている。この和而不同の精神を持つことこそは個の充実を目指す目標であると信じている。諸君も時に応じて自分の行動を反省し、小人同而不和とならないよう自戒されんことを希望する。

沖 縄 で の 気 象 観 測

岸 保 勘 三 郎 (地球物理)

去る2月14日から28日まで、沖縄本島を中心にして2週間にわたる「気団変質」の気象観測が行なわれた。固苦しい言葉で言えば、国際的な地球大気開発計画(GARP)の副計画、気団変質観測計画(AMTEX)が行なわれた。

よく知られているように、冬期には台湾、南西諸島、九州海域に沿って暖い黒潮が北上し、この海域に中国大陸から冷い寒気塊が吹き出している。このような時には、黒潮海面を通して海から大気へ顕熱・潜熱の形でエネルギー輸送が行なわれている。黒潮の平均水温は摂氏20度以上であり、中国大陸からの吹き出し気塊の気温は数度であるので、大気中へ海面から輸送される熱エネルギーは1平方糎につき毎分1カロリーにも達する。

このような熱エネルギーは、積雲の形で自由大気(地面摩擦のきかない高度1糎以上の大気)に運ばれ、最終的には俗称台湾坊主といわれる小低気圧の発生、そしてその運動エネルギーに転化されている。しかしこれらの物理的機構は、いままで海洋上の観測がひとつもないことも手伝って、よくわかっていない。

この点で、今年はずじめて海洋上の観測(船舶を利用)を含めた気団変質の観測が計画されたわけである。

日本の気象界では特定の場所、特定の期間に、世界各国の人々と協同観測をすることは、はじめてのことであり、そのために準備も数年前から始められた。今年の観測では、参加者はオーストラリア、カナダ、アメリカの研究者に限られたが、もう一度行なわれる来年冬の観測には、われわれとしてはソビエト、中国、さらに東南アジアの国々の研究者の参加を期待している。

観測が始まってみると、いろいろと思わぬ突発事故が伴うものである。例えば大変期待されていた米国の大気物理研究所のジェット観測機が、故障でハワイまできて本土にひき帰えてしまった。アメリカ本土での修理を終え、2月26日頃沖縄に飛来したいとの電話連絡があったが、2月28日には日本の3隻の観測船(気象庁の啓風丸、凌風丸、海上保安庁のおじか)は観測終了となっているので、残念ながら本年度の観測参加をあきらめて貰うことにした。また沖縄本島の北部に陣取っていた東大海洋研の乱流観測グループは米軍基地(?)からの強力なレーダー電波障害にあい、そのノイズを除くのに

大半の時間を費してしまった。観測の後半には秒速20米以上の強い寒波の吹き出しがあり、気象研究所のけい留気球のカバーがズタズタに破れ、観測中止をいう事態になったりした。

しかし約百人以上の研究者が準備期間もいれて、3週間近く沖縄近辺の島々で生活し、大きな事故もなく無事観測を終了できたことは何よりのことだと思った。またわれわれにとっても、今回の野外観測はそれなりに貴重な体験であった。

今回は多数の外国からの参加者があったために、器材の外国製品としての持ち込み、外国航空機のナワ飛行場の使用、それに伴う滑走路使用料、格納庫使用の税金免除などに関し、沖縄税関、空港事務所などへの挨拶回り、沖縄辺地での観測に伴う公共地の土地使用、電源用のケーブル設置などの便宜供与に関し、県庁、役場への挨拶回り、また今回の観測の意義を理解してもらうために報道機関への挨拶回りなど、まる2日間歩きまわった。おかげで現地のテレビ、新聞で観測のことがかなりこまかく報道され、そのために現地の人々の協力がかなり好意的にえられた。学術目的というので、レンタカーの使用料を半額にして貰ったり、観測センターと避地との連絡用に、その土地の唯一の公民館の電話利用の便宜などをうけたりした。

私は2月末の修士論文発表会のために、観測終了の3日前に帰京せざるをえなかったが、3週間ばかりの沖縄滞在中、何ひとつ沖縄の観光地をみて回る機会がなかったのは残念であった。ただ1日だけ、那覇市の観測センターから沖縄本島の北端にあった東大海洋研のグループに磁気記録テープを補給しに行く機会があり、その時はじめて那覇市以外の風景に接することができた。沖縄での唯一の交通機関であるバスで4時間ゆられて、那覇市から現地へ北上した訳であるが、その間ずっと車窓の右側にみえる広大な米軍の基地とは対称的に、左側には珊瑚礁でとりかこまれたきれいな海を眺めることができた。その時はじめて海は青いものであるという少年時代の思い出がよみがえった。

沖縄本島の北に近づくにつれ、バスに乗ってくる乗客の会話はさっぱりわからなかった。また同じ車中の学校帰りの元気な小学生の団のいきいきとした会話のやり

とりさえも、私にはほとんど理解できなかった。

亜熱帯性の気候、それに風俗、言語、ラジオなどででき
く美しい沖縄民謡など、私には凡ゆるものが珍らしく感

ぜられた。いつか、またひとりの旅人として、ゆっくり
と沖縄を訪ねてみたいと思った。

論 文 洪 水

佐々木 亘 (物理)

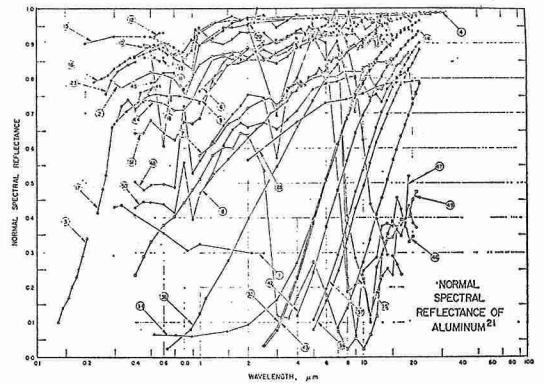
この数年、新顔の学術雑誌が次々に刊行されている。その多くは、新しい、又かなりせまい専門分野のための雑誌で、いわゆる学会には属さない組織の編集になるものが少ない。これらの新しいタイプの雑誌は、論文著者にとってもいろいろなメリットがあって、研究成果はメンバーとして加入している学会の雑誌——Society Journal——に発表するという、在来の慣習は曲り角に立たされた感が深い。

これらの新興雑誌の出現に加えて、ふるくからある Society Journals の中でも増頁の目立つものが多く、図書室の書棚空間はみるみるうちに喰いつぶされている。われわれになじみの深い Physical Review は、今年年間厚さ 2 m に達し、書棚侵略者の筆頭格として、表紙の色に因んで Green Monster の異名を奉られている。

雑誌の他に、雑誌に掲載される前の段階である preprint の往復も頻繁である。私自身の手許に届けられるものでも、積み上げてゆくと月に 10 cm の割合で高くなってゆく。

論文の洪水である。1940 年代に始まった基礎科学への膨大な投資は、研究業績をあげることを、当然のことながら、至上命令として、続けられてきた訳で、それが現在われわれの前に論文の洪水となってあらわれているのである。基礎科学そのものの是非を問う声に同ずる気持はないが、研究奨励の方式の中に、生産された論文の整利と利用という発想をもとり入れることは、緊急の要請である。

右上の図はアルミニウムの normal reflectance のスペクトルの実験結果 49 例を集めたグラフで、Purdue 大学の Thermophysical Properties Research Center を主宰する Touloukian 教授の手になるものである。データの散らばりは大変なものである。勿論、これは試料の多様性——それが蒸着膜であるか、フォイルであるか、あるいはバルクであるか、又バルクではどのような表面加工をしたものであるか——の反映ではあるが、それを考慮しても、ばらつきは余りにも大きい。それぞれの仕事がそれなりの価値をもつことは認められるにして



も、この図のようにまとめられると、そこに多少の疑問が湧かない訳にはいかない。T教授はこのグラフを見せ、enterprise を破壊することは重々戒めながら、研究費の配分が、せがまれて wife に流行の dress を次々に買い与えるようなやり方で行なわれてはならないと強調した。先日開かれた primary journal の将来についての日米セミナーの席上でのことである。論文の洪水の中からデータを拾い集めるという作業にエネルギーを集中するT教授の信念ないしは馬力に敬服すると同時に、問題はもうわれわれのコントロールの及ばない所まで来ているのではないかという絶望感を否定することはできない。

論文を書くという作業が、研究という精神活動にとって本質的な意味をもつことはいうまでもない。出来上がった論文は、何等かの手段によって disseminate され、そして次のステップの研究の礎石として retrieve されるべきものであることも論をまたない。論文洪水がおこる前、1950 年代までは、Society Journal がこのの手段として、まことによく機能していた。実際、印刷された雑誌という形態は、その種類が少なく、一冊の厚さが手頃であれば、全く申し分のない d-r の手段である。ところが、その種類が際限もなくふえ、一冊が電話帳に匹敵する厚さを持つとなると、d-r の機能は失われてしま

う。書棚空間がせばめられるということは、古い雑誌を棄てるとか、あるいは古い雑誌をマイクロフィッシュ化するかという対策があろう。しかし d-r の手段をどうすればよいかというのは、そう易しい問題ではない。誇張していえば、この問題が解決するのは基礎科学の終焉の日であるということになり兼ねない。

論文が多すぎるというなら、閲読をきびしくして、質のよいものだけを出版すればよいではないか、というのは一つの考え方である。しかし事はそう簡単ではなさそうである。現にこういう方針で長読きした雑誌はないようである。これは編集者や閲読者の力量によることかも知れないが、閲読をきびしくするととかく無難な論文だけが通り、雑誌から活気や精気が抜ける傾向があるのは否定できない。昨年ノーベル賞の対象となった Josephson の論文は、閲読のほとんどない雑誌に最初に発表されたが、閲読のきびしい雑誌に投稿したのでは掲載までに時間がかかりすぎるであろうという思惑で、彼は雑誌を選んだのだそうである。元々、論文がふえた

のは研究人口がふえたことから出てきたことで、人為的にそれを抑えようというのは無理な話かもしれない。

はじめにふれた Green Monster は、著者の属する研究機関から高額な投稿料（1頁当たり2万円位）をとって少なくとも雑誌の出版費に関しては後顧の憂がないようにしている。我国の学会が経営難の故に雑誌の頁数を制限したり、閲読をやかましくしたりしているのとは対照的である。厚さが年間 2m に達する理由もここにあるが、論文の平均的な質から考えて、どんなに厚くなってもそれを retrieve しようという支持者には事欠かないようである。われわれから見るとある意味で羨しいが、これが先ながく続くとも思われない。というのは購読者の数が、1967年頃を境にしてどんどん落ちてきているからである。

余り知恵のない話だが、論文洪水は天敵が出現するまで手を拱いて待つより手がなさそうである。ただ現状には大変な問題があることだけはお互いに認識をもつべきであろう。

仏語と友達になる話

高橋 武 美 (化学)

学部に進学して数年ほど経った頃、講義や実験と関連した文献の中に自分の不得意な語学で書かれたものを見出した時、当惑を感じた経験を誰もがもっておられることと思います。小生にとって、仏語はその一つでありました。ご承知のように、わが国の語学教育では大多数の学生は先ず英語、ついで独語を学習するのが普通であり、その他の語学については、少数の方の場合を除きなじみが少ないわけです。理学部の先生方、学生には語学に堪能な方が多く、それぞれこの問題について一家言をお持ちのことと存じます。皆様のお役に少しでも立つことを念じ、小生の経験を以下に述べます。

仏語は国際用語の一つとして、特に外交、文化、芸術の方面で人気があることは、小生の学生時代も同じで、学部の友人の中にアテネ・フランセ（お茶の水）に通うものが数人おりました。それにつられ、美しいマドモアゼルの先生のクラスに出ましたが、クラスの前方の席に頑張っている2、3の生徒が、小生の分らない会話を自由にこなすのに気おくれして、間もなく敗退しました。あとで分ったことは、これらの人達は既に2年ほど勉強している連中であつたのですが、後の祭りでした。気を

取り直して、再び挑戦したのは大学院に入った頃でした。今度はどうやら続き、はじめはほとんど分らなかった会話も、いつの間にかだんだんと分るような気がして、皆よりあまり後れずに笑えるようになりました。また、化学教室の友人と文学部の講義にもぐり出、中島健蔵先生の Verlaine の詩の論評を拝聴（盗聴）しました。化学実験で若干現実的になっている頭には、文学の話はまことに心地よく（これも専門となるとさぞ酷いことと思いますが）、「今日はいつもより出席がよいね」と言われ、思わず冷汗を流したことも楽しい思い出です。当時、実力のある人達は、日仏会館（お茶の水）内にあったクラスに出ていましたが、アテネ・フランセで3年ほど経った頃、これが発展的に解消し、新しく日仏学院（飯田橋）が開校されたのでこれに移りました。エコール・ノルマル出身のジャン・ルキエ氏が館長で大いに張り切っておられ、すっかり francophile になりました。少し慾を出して Cours de diplôme のクラスに出席し、フランス文学、歴史、地理、その他の講義をききました。和文仏訳はカンドー神父の担当で、「高瀬舟」の仏訳でしたが、日本語がわれわれ日本人以上に達者な

神父の仏訳は、原作以上とも思われる名訳で、語学勉学の高いレベルを雲間に眺める思いでした。また、フランス人が自国語を如何に美しく保とうと努力しているかの気迫を感じた次第です。2年後に仏国留学が実現し、勉強したフランス語がどうにか役に立つことがわかった喜びは小生にとって忘れることが出来ません。

外国人にとって、ある語学に達者であるための最良の方法は、その国で生れその国の教育を受けることであることは勿論ですが、特に幼時から小学校の間をその国に過ごされた人はその発音がそのまま記憶されているようで、このような人は特別な例外に属します。われわれのように、新しく外国語を学ぼうとする者にとって一番手っ取り早いのは、その国へ行って直接その国の日常生活の中に飛び込むことですが、これも地理的事情から日本は大いにハンデを負っていることになります。必然、われわれは語学学校へ通うことから始めることとなりますが、幸いわれわれ本学にいる者にとって、前記の2学校が近い所にありますので、これを大いに利用すべきだと思います。以下要点と思われることを箇条書にしました。

1. 外国人(仏人)の先生につく。特に最初が大事で、初めから外国人の先生の発音を耳にすること。
2. 心臓を強くすること。相手(先生)の話していることがわからなくとも、相手(先生)は日本語がわからないので同等である。
3. 授業に出たら一番前の席をとる。当てられるのは誰でも嫌であるが、それを克服してこそ上達がある。
4. 最初は1週間の異なった日に少くとも3回以上(各1時間の授業で)出る。特に最初は大事で、1週間に2回の頻度では忘れる方が早い。1週間のある1日に3回出たのでは合計回数と同じでも頭が混乱して上達につながらない。
5. 最初の6ヶ月を欠席せずに頑張る。挫折は最初の1~2ヶ月が非常に多い。
6. 文法は気にしないで、とにかく話す。いくら実力のある人でも話さなければ相手にとっては意志の疎通は

0である。実力が30/100の人でも30話せば、あるいは50位の意志の疎通ができる。

7. 以上が実現したら、あとは自然に自分から出席したくなる筈。次の1年、2年を大切に。2年やれば、その後若干の空白があっても、簡単には忘れない。

以上、実戦的な話のみで、語学勉強法そのものについては述べませんでした。動詞の *déclinaison*、前回の授業の文章の暗誦など、毎回反復訓練があり、ともかく出席を続けてさえいけば自然に上達の道が開けます。また、上級のクラスに進学すれば、文学的な興味をもった方も大いに満足される筈です。

語尾変化の多い語学は文章論が比較的やさしく、語尾変化の少ない語学は文章論が難しいとされていますが、前者に属する仏語は語尾変化を修得すれば、後者に属する英語より学習しやすいように思われます。ともかく、仏語に限らずある一つの語学をマスターすることが肝要で、心臓が強くなることにより、2番目、3番目の外国語の修得はかなり容易となると思われます。

フランス語は、“Serments de Strasbourg (ストラスブールの宣誓; 842年)”がその最古の文献とされ、中世を経て16世紀の半ば頃より現代フランス語にはほぼ近いものになったといわれています。辞書としては、文学者は Littré-Beaujean の “Dictionnaire de la langue française” を尊重しております。百科全書的なものとしては、歴史的には Diderot-d’Alembert の “Encyclopédie” が有名であり、現代のものとしては Larousse の辞書があります。専門家でないわれわれの語学の勉強には、数多くあるそれより小型の百科辞典ではない仏-仏辞典をできるだけ早い時期より使用することが上達の道と存じます。

最後に、毎年10月上旬頃、フランス政府給費留学生の応募要項が文部省および在日フランス大使館より発表されます。試験は例年11月から翌年1月頃にかけて行われますが、学生方には奮って応募されますようこの紙面をお借りしてお願い申し上げます。

坂田さんと共に40年

立見辰雄(地質)

坂田嘉雄さんをお送りする日がとうとう来てしまった。想い起せば、坂田さんのお付き合いは私の入学時

(1936)から始まり、以来すでに40年近くを経たことになる。

坂田さんは昭和4年9月から地質学教室に勤務され、最初は坪井誠太郎先生の御研究のお手伝いとして、主に高温における珪酸塩鉱物結晶作用の実験に従事された。昭和18年には助手になられ、教室内電気関係一般にも目を配られるようになった。その後第二次大戦後早々にアメリカから自動記録装置付X線回折計（いわゆるノルレコ）が輸入され、各大学関係研究者の共同利用施設として地質学教室に設置されてからは、その保守管理に専念された。この回折計は当時としては画期的なもので、これの使用によりこれまで鑑定不可能であった多くの鉱物が微小微量のものについても確実に識別されるようになり、あるいはそれらの結晶構造研究に極めて大きな影響を及ぼした。同一機械の多人数による使用に当っては、その保守管理はいうまでもなく特に大切な仕事で、常時機械の性能を十分に発揮させるためには、この仕事に当る人の力によるところが極めて大きい。坂田さんはその任務を美事に果されて、その恩恵を受けた研究者の数は計り知れない。坂田さんの機械に対する正確な知識と忍耐強い几帳面さ、さらには温和な性格が、この仕事に特に向いていたと、われわれは非常に感謝している。この時輸入されたX線発生装置の方は、もうずいぶん前からポンコツ状態に入りながら、坂田さんの絶えざる努力によって今でも何とか働いている。しかし、坂田さんの御退官と共に、いよいよその寿命が尽きることになるかも知れない。

坂田さんに関連してどうしても忘れることの出ないなのは、日本地質学会の実質的事務局長としてのお働き

である。この学会の創立以来今日に到るまで、その事務は東大地質学教室が負担して来た。もっとも戦後いくばくもなく学会の費用で専門の事務員がおかれるようになってからは、だい分この負担も軽減されたが、坂田さんはそのまとめ役としてこれまでずっと大変な努力を重ねて来ておられる。少なくとも戦後の日本地質学会の活動は、坂田さんのこの努力なしには行なわれ得なかったであろう。全くの縁の下の方力持ちとして、日本の地質学界のために働かれた坂田さんに対して、私たちは何とも御礼の申し上げようもない。

坂田さんはごく穏やかな方で口数もあまり多くはないので、私も詳しいことは判らないが、坂田さんの趣味の一つに鉱物採集がある。鉱物採集を趣味とする人は世の中に多く、その集りもたくさんあるが、有名な一つは「無名会」であろう。神田須田町の著明な鳥料理屋ぼたんの御主人桜井欽一さんを中心とした集りで、なかなか活発に活動しており、この方面ではわが国有数のものであろう。坂田さんもこれのメンバーの一人と伺ってお承知して、今でも時折り採集旅行に出かけておられるようだ。これまでにどんなものを集めておられるのかは残念ながらいないが、時々雑談の際にその片鱗を伺うことがある。

この40年ばかりの思い出に尽きることはないが、何よりも印象的なのは、その温厚さと几帳面さである。本当に長い間お世話になりっぱなしで申し訳けなく思っている。これからも益々御健康でお暮しのことを、心からお祈りしたい。

神谷さんの退職にあたって

桑原五郎(物理)

物理学教室レンズ工室の技官神谷光さんが、3月末日年退職されました。

レンズ工室は実験に用いられるレンズ反射鏡等を製作するため、昭和19年神谷さんの就任と共に設けられました。学内唯一の施設であったため他教室、他部局からの注文も可能な限り引き受けて来ました。

創設初期には光学関係研究室の仕事が大部分でしたが、生物物理、レーザー等の研究が行なわれるようになる共にと仕事も増え、内容も通常のプリズム、レンズから特殊なセル、結合孔をもつ反射鏡等と多岐にわたり、取扱う材料も光学ガラス、石英から螢石、LiF、Geとひ

ろがって来ました。研究用部品の常として数は少くとも通常の工場では引き受けない様な特殊仕様のもの、高精度を要するものが大部分でしたが、神谷さんは乏しい予算と設備の下で色々工夫をして我々の要望を充てて下さいました。特に数cmの範囲で高低差が波長の数分の1といういわゆるワンカラーの面は普通恒温室内で製作するものですが、西びのあたる工場で不十分な設備を使って苦勞して作っておられました。

神谷さんは温厚、勤勉な方で唯一の趣味は毎日帰途鉄門付近の酒屋で一杯飲んで帰るご様子でした。

戦中戦後の物のない時代から苦勞して設備をととの

え、30年の永い間縁の下の力持ちとして研究の助力を
して下さったことを深く感謝すると共に退職後の御健康

と御多幸を祈る次第です。

私の読んだ本 (11)

川口・河盛・杉・本田 共訳

エーヴ・キュリー「キュリー夫人伝」(白水社、1938初版)

平川浩正(物理)

Ève Curie: Madame Curie, nrf. Gallimard, 1938.
川口 篤・河盛好蔵・杉 捷夫・本田喜代治 4氏によつて美しい日本の文章になおされたこの本。その頁を繰った日のことを感慨をもって想起される方があるにちがいない。書物を手に入れることが不自由だった時代、いやそれよりも何をよりどころにしたらよいかかわからないような激しい時代、を通じて多くの人の心の支えとなってきた本である。Marie Curie の波瀾に富んだ生涯は外面的に劇的要素にみちているが、その業績や生活の輝しさ以上に珍重すべきもの、すなわち確固不拔の性格、不撓不屈の努力、どのようなめざましい成功も不遇不境もその異常な純真さをかえることのできなかつた魂がここに書きあらわされている。

著者はどんなにか深い感動にとらわれて書いたのだろうか。いきいきとした構成、いろどりのある描写、全篇が愛情ある筆致にみちている。はやく夫人をなくして不器用に4人の子供の成長をみまもる父 Sklodowski 教授の横顔、姉 Bronia との間の生涯にわたっての互の献身の絆に結ばれた交流、結婚して愛する祖国 Poland の国籍を離れ Paris に永住しようとする決心を書いてくる Marie に Warsaw で家を守る兄 Joseph が理解と激励をあたえ祝福のことばを書き送るくんだり、Pierre との結婚生活、夫亡きあと Marie が2人の娘 Irène と Ève にそそぐ慈愛、など心を動かされるところが多いが、著者が一人の人間として Marie によせる愛情の表現も美しい。Larcouëst での夏休みのスケッチ、最後の病床の記事。女学校を出たとき Sklodowski 教授は Marie が将来の方針を定めるに先立って一年間の休暇をとって田舎に行くことをきめた。地平線以外に何ひとつ目にとまるものもない平和な土地で、自由奔放に教科書などそっちのけにして遊んだ一年、その終りの盛大な舞踏会 (kulig)、「ずっと後のこと、母は時々楽しかったこの頃のことを、優しい、そしてすべてを諦めたよう

な声で語ってくれた。私は、半世紀に垂んとする心配と過労に疲れ衰えた彼女の顔を眺めた。そして私は、この女性に厳酷な使命を課するに先立って、櫓に乗って kulig の乱痴気騒ぎを追いかけ、一夜にして革の舞踏靴を履きつづすことを許してくれた運命に感謝した。」

6年間、住込みの家庭教師をやつて貯金し、彼女は Paris 行の汽車に乗る。1891年11月3日 Sorbonne で第一学期開講。Marie は今や——なんとうれしいことであらう——理科大学の学生である。ここで大学や実験室の話が始まるのだが、著者が自ら経験したことであるかのように筆は自然に流れる。毎年3月駒場の入試の発表があつてよろこびと希望に満ちた後輩の顔をみると、いつも自分は Marie が大学に入ったときのこの文章を思い出し、みんながこれからどんな学生生活をおくるだろうかと考える。自分の場合はバス停留所(安田講堂前)の掲示板に32人の物理学科の入学者の氏名がはり出されていた。授業は第1食堂の上の法文28番教室で行なわれたが、魅せられる思いのした講義がいくつかある。先生の方もベルトのはしが尻尾のようにひざのあたりまで垂れていたり、ポケットのそこが裏返しになつて外に出ていたり、超俗の雰囲気は十分だった。12月の Newton 祭では、昔 Curie 夫人から田中館先生に來たという葉書が披露された。1年が終るころ、2,3人の友達と同級生の大野(土岐)鑑子さんを取りかこんで「Curie 夫人みたいなひとにちがいないと思っていたんだけど」と遠慮のないことをいった。あいすまませんとくびをすくめてから「あの伝記に書いてあることは及びもつかないようなことばかりで、あの本を読むとゆううつになるのです。」といわれて、自分の読み方があまかつたかと思つた。

伝統ある西欧の大学の学位試験の流儀は、厳格であるがつつましい儀式の中に深い情緒的な価値があるようだ。自分は本郷で学位論文の審査をうけたり審査に加つ

たりしたが、時代も場所もちがって、Paris 大学で Marie が経験したような劇的要素は見当たらないようである。Paris の Radium 研究所。今日は図書室で研究所のお茶の会が開かれた。外国から来た留学生が仕事を終って帰国するのだ。所長の Curie 夫人が立上って話している。「あなたの美しいお国、私もよく知っており、また私が行きました時にお国の方々が熱心に歓迎して下さいましたあのお国にあなたがお帰りになっても、どうぞこの

Radium 研究所を懐しい所として思い出して頂きたいと存じます。われわれが非常に働いていること、われわれがベストを尽していることは、あなたによくおわかりになっていると思いますから……。」California にいたとき、自分は古本屋でこの本の英語版をみつめて下宿で読みなおした。Curie 夫人のこのあいさつのくぐりに来て、自分はある感傷がこみ上げてくるのを禁じ得なかった。

3 月理学部会合日誌

- 6 日 (水) 1:00~ 3:00 会計委員会
- 11 日 (月) 2:00~ 5:00 理学系研究科委員会
- 13 日 (水) 1:00~ 3:00 教務委員会
3:00~ 5:00 主任会議
3:00~ 5:00 将来計画委員会
- 18 日 (月) 12:00~ 2:30 学部長と理職との定例交渉
- 20 日 (水) 10:00~11:30 人事委員会
1:00~ 5:20 教授会

教授会メモ

3 月 20 日 (水) 定例教授会
理学部四号館 1320

1. 前回議事録の承認
2. 人事異動等の報告
3. 卒業生成績決定の件
4. 研究生の期間延長ならびに入学の件
5. 昭和 49 年度受託研究員の申請の件
6. 寄附について
7. 人事委員会報告 (寺山)
8. 会計委員会報告 (吉川)
9. 将来計画委員会報告 (黒田)
10. 総合大学院について (学部長)
11. 教務委員会報告 (岩堀)
とくに進学相談室設置について
12. 評議員の改選
下郡山教授が再選された。
13. 理学部新館について (下郡山)
14. 高エネルギー実験施設運営規則(案)の審議
15. 全学広報委員の交代
森田助教授から池上助教授へ
16. 全学高速計算機センター委員の留任
高橋教授 (物理), 後藤教授 (情報), 斎藤助教授

(地物)

17. 東大百年記念事業について (大木)

教室主任 (49. 4. 1)

数	学	伊	藤	教	授
物	理	佐々木	木	"	"
天	文	末元	元	"	"
地	球	吉田	田	"	"
化	学	稲本	本	"	"
生	化	野田	田	"	"
動	物	寺山	山	"	"
植	物	古谷	谷	"	"
人	類	渡辺	辺	"	"
地	質	飯島	島	"	"
鉱	物	竹内	内	"	"
地	理	佐藤	藤	"	"

施設の長 (49. 4. 1)

臨	海	小	林	教	授
植	物	園	門	司	"
地球	物理	研究	施設	福	島
情報	科学	研究	施設	高	橋

理学系研究科専門課程主任

数	学	木	村	教	授
物	理	小柴	柴	"	"
天	文	末元	元	"	"
地	球	物理	吉田	"	"
化	学	佐佐木	木	"	"
生	物	化学	野田	"	"
動	物	江上	上	"	"
植	物	飯野	野	"	"
人	類	渡辺	辺	"	"

地	質	飯	島	教	授	相	関	理	化	学	佐	々	木	教	授
鉦	物	湊		"		科	学	史	・	科	学	基	礎	論	渡
地	理	吉	川	"											

人 事 異 動

(助 手)

教室	官職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
物 理	助 手	久 保 謙 一	49. 3. 1	配置換	原子核研より
物 理		高 崎 史 彦	49. 3. 3	助手に採用	
化 学	助 手	梅 沢 喜 夫	49. 4. 1	休 職	
数 学	助 手	松 本 幸 夫	49. 4. 1	教養学部助教授昇任	
数 学		堀 川 穎 二	49. 4. 1	助手に採用	
化 学		磯 谷 順 一	49. 4. 1	助手に採用	
化 学		石 塚 英 弘	49. 4. 1	助手に採用	
生 化		稲 垣 冬 彦	49. 4. 1	助手に採用	
地 質		西 村 年 晴	49. 4. 1	助手に採用	
地 質		豊 原 富 士 夫	49. 4. 1	助手に採用	
地 質		鹿 園 直 建	49. 4. 1	助手に採用	
地 質	助 手	杉 村 新	49. 4. 1	神戸大学教授昇任	
地 質	助 手	坂 田 嘉 雄	49. 4. 1	勸奨退職	
情 報 研		三 好 和 憲	49. 4. 1	助手に採用	
化 学	助 手	内 藤 周 弑	49. 4. 25	休 職	
地 物 研	助 手	平 沢 威 男	49. 4. 1	極地研究所助教授昇任	

(講師以上)

教室	官職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
物 理	講 師	橋 本 淑 夫	49. 3. 1	復 職	
化 学	助 手	原 田 一 誠	49. 3. 1	教育職 (-) 3 等級 (東京大学講師理学部) に昇任させる	
生 化	教 授	宮 沢 辰 雄	49. 4. 1	東京大学教授理学部に配置換する	大阪大学より
地 質	助 教 授	佐 藤 正	49. 4. 1	筑波大学教授昇任	

外 国 人 客 員 研 究 員

教室	国 籍	氏 名	現 職	研究期間
化 学	米 国	Michel Boudart	スタンフォード大学教授	49. 4. 1~49. 6. 30

3 月 海 外 渡 航 者

教室	官職	氏 名	渡航先国	渡航期間	渡 航 目 的
植 物	教 授	飯 野 徹 雄	アメリカ合衆国	3. 2~ 3. 11	スコobarレー分子生物学会議出席
数 学	教 授	河 田 敬 義	アメリカ合衆国	3. 3~ 3. 15	IMU (国際数学連合) 実行委員会およびスイス連邦工科大学にて数学の研究

物理	教授	山崎 敏光	アメリカ合衆国	3. 10~	3. 23	ミュー中間子スピン回転の実験
化学	教授	斎藤 信房	アメリカ合衆国	3. 22~	3. 31	トレースアナリシス用標準物質の分析に関する協力研究に関する研究打合せ
地質	助教授	鎮西 清高	アメリカ合衆国連合王国, イタリア, スウェーデン, ドイツ連邦共和国	3. 1~50.	2. 28	海洋古生態学に関する研究
生化	助教授	森田 茂広	ソビエト連邦共和国	3. 16~	5. 14	モスクワ大学において生物化学に関する講義および研究を行なうため
鉱物	講師	武田 弘	アメリカ合衆国	3. 17~	3. 31	第5回月科学会議出席および月資料に関する研究連絡および調査
化学	助手	太田 俊明	アメリカ合衆国	3. 4~	4. 4	1974年度ピッツバーグ会議および「エスカレーター ESCA 装置」に関する研修会
地物	助手	水谷 仁	アメリカ合衆国	3. 16~	4. 14	第5回月科学会議・MIT セミナー・米国地球物理学連合学会会議出席

昭和49年3月28日
理学部卒業生氏名

(219名)

数 学 科 (33名)

伏見 厚生 北岡 正治 金 永 淑
 萩野 直行 久保田 昌均 桑 原 冬 樹
 植田 和男 青山 井 伸 二 片 岡 尚 志
 勝野 裕文 白井 耕 伸 二 清 野 龍 介
 久保 明夫 倉本 義 義 之 治 栗 高 橋 昌 秀
 神保 道夫 田尾 龍 治 夫 高 田 中 畑 原
 高橋 誠尚 寺 島 尾 和 宏 明 彦 理
 田中 秀久 宮 地 晶 裕
 舟木 直真

物 理 学 科 (63名)

吉沢 隆一 岩本 隆 白木原 康 雄
 矢野 安重 岩間 憲三 白川 典 幸
 本田 憲治 赤沢 光典 浅川 辰 司
 本荒 木 俊 家 泰 弘 石 畑 下 猛
 伊藤 公孝 井上 早 苗 井 大 塚 孝 治
 岩本 直樹 上 田 昇 大 塚 孝 治

塚洋一 大橋正秀 春日 隆
 金子修博 郡司 隆男
 小島誠治 酒井 明 佐藤 卓治
 鈴木俊夫 十河 清 高草 保夫
 高田康民 高橋 隆 立岡 登与次
 田中茂博 千葉 順成 坪野 公夫
 常中深岡 英弘 隆章 中川 穰 一治
 中田本 田 素 行 実 夫 豊 夫 充
 深田 島 尾 紀 渡 湯 谷 洋 原 田 英 生 阿 部 良 人
 森 渡 小 福 井 康 雄 佐藤 路 宮 茂 樹 柴 橋 博 資

天 文 学 科 (8名)

湯 谷 洋 原 田 英 生 阿 部 良 人
 小 福 井 康 雄 佐藤 路 宮 茂 樹 柴 橋 博 資

地 球 物 理 学 科 (18名)

太田 陽一 横倉 隆伸 泉 正 史
 田 東 潔 川 合 実 久保田 雅 久
 伊 栗 田 敬 鈴 木 孝 幸 高 田 義 久
 高 橋 栄 一 深 沢 理 郎 藤 井 良 一

別生 栄 松 沢 多 聞 松 田 佳 久 藤 田 清
松 林 修 三 浦 秀 夫 米 田 徹 田 清

昭和 49 年 3 月

大学院修士課程修了者氏名

(220 名)

(理学系研究科)

化 学 科 (44 名)

一 戸 省 二 相 山 長 和 石 野 勝
上 原 洋 子 江 藤 弘 純 海 老 充
遠 藤 敏 之 大 藤 加 多 志 太 田 成
小 川 芳 樹 萩 隅 野 孝 史 加 太 藤 正
蒲 生 俊 敬 木 村 友 彦 哉 木 小 山 康
苔 口 久 雄 小 界 新 合 藤 尚 保 久 真 波 元
齋 藤 裕 孝 郎 明 博 郎 士 郎 博
白 井 木 榮 一 德 史 卓
鈴 木 橋 田 史 忠 卓
高 鈇 田 山 田 井 田
島 本 村 山

数 学 (22 名)
伊 藤 達 郎 石 井 一 平 織 田 孝 幸
太 田 雅 巳 加 砂 彰 桂 本 利 行
川 原 岡 省 人 田 利 一 彰 田 本 隆 進
長 岡 英 吾 吾 孝 郎 一 田 田 夫
藤 岡 直 德 德 和 郎 藤 田 野 元
三 原 洋 紀 紀 一 寿 町 水 三
宮 岡 憲 一 吉 健 矢 口 三
山 岡 憲 一 吉 健 矢 口 三

生 物 化 学 科 (13 名)

原 田 勇 井 上 督 三 伊 庭 英 夫
大 坪 研 一 栗 栖 眞 理 子 小 島 光 洋
小 林 一 三 優 子 倉 川 和

物 理 学 (50 名)
浅 井 吉 蔵 麻 多 進 天 川 博 隆
猪 川 元 興 池 添 博 石 倉 誠
岩 佐 義 泉 宇 川 昇 彰 小 神 和 男
小 野 隆 正 岡 狩 野 一 覺 嘉 本 幸 秀
田 藤 直 幸 倉 倉 本 義 夫 傑 仁 充 高 河 原 俊 秀
須 藤 幸 三 滋 覺 明 夫 昭 一 三 夫 夫
杉 森 英 明 宜 郎 昭 一 三 夫 夫
高 木 川 瀬 原 永 田 田 田 博
中 廣 藤 松 村 吉 和
廣 藤 松 村 吉 和

生 物 学 科 (動物学) (11 名)

岡 本 保 関 谷 雄 一 田 中 憲 太 郎
小 林 裕 太 郎 福 井 孝 紀 高 濱 口 邦 昭 哲
竹 井 祥 道 雄

生 物 学 科 (植物学) (7 名)

飯 田 利 明 河 西 哲 郎 下 妻 道 郎
松 尾 妙 子 武 田 穰 松 村 隆

生 物 学 科 (人類学) (5 名)

青 木 健 一 河 内 眞 紀 子 眞 家 和 生
松 浦 秀 治 三 浦 啓 志

地 学 科 (地質学鉱物学) (10 名)

池 田 啓 一 郎 大 野 高 義 岡 本 英 夫
風 間 博 美 介 菊 池 順 一 悦 高 橋 正 樹
高 橋 隆 介 藤 井 精 悦 增 田 俊 明
和 田 哲

地 学 科 (地理学) (7 名)

空 花 正 人 涉 沢 宏 司 神 保 裕
武 内 和 彦 田 中 公 正 中 田 光 治

天 文 学 (8 名)

稻 谷 順 司 井 上 一
佐 藤 信 夫 篠 原 正 雄
三 上 孝 雄

地 球 物 理 学 (20 名)

宇 田 川 雄 司 唐 戸 俊 一
田 谷 内 和 謙 介 治 芳 人
竹 古 宮 下 岡 直 秀
吉 宮 岡 直 秀
渡 邊 直 秀

化 学 (39 名)										西野 栄正	箸本 春樹	藤村 達人
岩田 鍊忠	井本 英夫	植弘 崇嗣	弘海 英伸	崇雅 伸興	西丸 田惠美子	人 類 学 (3 名)			秋道 智弥	石崎 寛治	佐藤 弘明	
大川 康行	木下 正一	小坂 新谷	田出 英樹	和 彰夫	地 質 学 (11 名)			井上 正澄	狩野 謙一	北村 健二		
菊地 英敏	榊原 雄彦	鈴木 實一	関口 和夫	川 登進	井小 德山	上 正澄	野 野 謙一	北村 健二	佐藤 弘明	藤岡 換太郎		
五味 敏行	近子 薰泰	住竹 立通	川 俊雅	田 克行	青木 正博	宮 英一	服部 惠峰	北村 健二	藤岡 換太郎	藤岡 換太郎		
末広 木橋	和 恒太郎	西村 横田	村上 克行	米 敏夫	鉱 物 学 (2 名)			宮本 正道				
高橋 和	恒太郎	西村 横田	村上 克行	米 敏夫	地 理 学 (6 名)			青木 正博				
田村 和志	子 子	横田 克行	村上 克行	米 敏夫	磯相 馬秀	望 広	榎 千葉	幸 立也	諏 米田	訪 哲郎		
山 和	子 子	横田 克行	村上 克行	米 敏夫	相 関 理 化 学 (20 名)			青木 孝之	新井 栄一	嵐 田和男		
生 物 化 学 (14 名)					青岡 小高	木部 孝之	新井 栄一	井野 良幸	一 誠行	嵐 田和男		
有坂 文雄	飯尾 邦子	上野 隆	野 敏郎	隆 俊久	青岡 小高	木部 孝之	新井 栄一	井野 良幸	一 誠行	嵐 田和男		
黒田 敏隆	齋藤 玉野	西垣 功彦	中村 上和	村 上久	青岡 小高	木部 孝之	新井 栄一	井野 良幸	一 誠行	嵐 田和男		
清水 重幸	西垣 功彦	中村 上和	村 上久	村 上久	青岡 小高	木部 孝之	新井 栄一	井野 良幸	一 誠行	嵐 田和男		
大和 正幸	西垣 功彦	中村 上和	村 上久	村 上久	青岡 小高	木部 孝之	新井 栄一	井野 良幸	一 誠行	嵐 田和男		
動 物 学 (9 名)					青岡 小高	木部 孝之	新井 栄一	井野 良幸	一 誠行	嵐 田和男		
岡村 直道	菊田 彰夫	小室 正人	室 海鷹	正 人子	青岡 小高	木部 孝之	新井 栄一	井野 良幸	一 誠行	嵐 田和男		
西賀 秀典	高井 中勝	長谷川 仁	鳴海 長谷川	仁 子	青岡 小高	木部 孝之	新井 栄一	井野 良幸	一 誠行	嵐 田和男		
野沢 昭典	高井 中勝	長谷川 仁	鳴海 長谷川	仁 子	青岡 小高	木部 孝之	新井 栄一	井野 良幸	一 誠行	嵐 田和男		
植 物 学 (10 名)					青岡 小高	木部 孝之	新井 栄一	井野 良幸	一 誠行	嵐 田和男		
鳴脚 建夫	片桐 仁一	川崎 信二	信 清俊	二 俊	石田 滋	木 昌博	昌 啓一	博 一	小川 真里子	川 純一		
鷺谷 いづみ	鈴木 孝仁	竹能 清俊	信 清俊	二 俊	石田 滋	木 昌博	昌 啓一	博 一	小川 真里子	川 純一		

理学博士学位授与者

昭和 49 年 3 月 29 日付授与者	氏 名	論 文 題 目
専門課程 学位規則第 3 条 2 項該当	島崎 邦彦	Crustal deformation caused by an underthrusting oceanic plate in eastern Hokkaido and the Nemuro-oki earthquake of June 17, 1973. (海洋プレートの引きずり込みに伴なう北海道東部の地殻変動と, 1973 年 6 月 17 日根室沖地震)
同	鈴木 弘道	Establishment of the Gravimetric Network in Japan. (日本の重力測定網の統一)
同	坂内 英一	Classification of certain multiply transitive permutation group. (ある種の多重可移群の分類について)
同	本橋 洋一	数論の諸問題と篩の方法
同	井上 淳	波動方程式に関係する数理物理学的諸問題について
同	中村 恵吉	Investigation of Hydrides of the Group IV a Va Metals by Nuclear Magnetic Resonance. (第四および五族金属水素化物の核磁気共鳴吸収による研究)
同	大木 健一郎	A Chromospheric Rarefaction Model of Solar Flares. (太陽フレアの彩層物質希薄化モデル)

昭和 49 年 3 月 29 日博士課程修了者 (65 名)

専門課程 数 学	氏 名	論 文 題 目
	フィン・ムイ	Modular Invariant Theory and Cohomology Algebras of Symmetric Groups. (モジュラー不変式論と対称群のコホモロジー環)
物 理 学	中 沢 宣 也	Anomalies, Light Cone Expansions and Radiative Correction to Leptonic Decay of π -meson. (π 中間子の軽粒子崩壊に対する輻射補正と光円錐展開)
同	黒 田 正 明	High Energy Hadron Scatterings based on the Composite Picture of Hadrons. (ハドロン複合的描像にもとづいた高エネルギーハドロン散乱)
同	山 崎 良 成	Nuclear Magnetic Moments of High-Spin Isomers and Spin Relaxation Phenomena. (高いスピンの持つアイソマーの核磁気能率とスピン緩和現象)
同	稲 垣 睿	Theory of Stable Magnetic Phases in an Orbital Degenerate Band Model. (軌道縮重系における安定な磁気相の理論)
同	小 野 嘉 之	Theory of Magnetothermal Resistivity of Antiferromagnetic Insulators at Low Temperatures. (反強磁性絶縁体の低温における磁場中熱抵抗の理論)
同	高 木 伸	Theory of Anisotropic Superfluids. (非等方的超流動体の理論)
同	名 取 研 二	The Theory of the Optical Activity in Crystals. (結晶における光学活性の理論)
同	小 野 盛 司	The Quark Model and Quark-Diquark Model. (クォーク模型とクォーク・ダイクォーク模型)
同	里 子 允 敏	絶縁体の極紫外スペクトルと電子状態
同	三 好 和 憲	膨張宇宙における宇宙銀河分布相関の時間変化
同	丹 下 寿 夫	プラズマ中の輸送現象および集団運動の研究—相関函数による解析
同	関 根 孝 司	容器内の直線電流磁場によって閉じ込められたプラズマの形
同	佐 藤 正 俊	Proximity Effect of Sn-PdNi Sandwich. (Sn-PdNi 合金重層薄膜の近接効果)
同	照 井 義 一	超流動相転移におけるスケーリング則と普遍性
同	小 野 晃 義	磁気およびピエゾ光効果による PbI_2 の研究
同	大 藪 修 義	Energy Dissipation in a Magnetic Neutral Point. (磁気中性点におけるエネルギーの散逸)
同	坂 恒 夫	回転プラズマの研究
同	佐 藤 浩之助	Studies on CO_2 Gas-Dynamic Laser by Means of Shock Tube. (衝撃波管による CO_2 ガスダイナミックレーザーの研究)
天 文 学	加 藤 隆 二	Shock Wave Model of the Expanding Ring in the Galactic Center Region. (銀河中心領域における膨張リングの衝撃波モデル)
同	野 本 憲 一	Penetration of Convective Envelope into Stellar Core and Existence of Neutrino Loss. (星における対流外層の中心核への侵入とニュートリノ損失の存在)
同	井 口 哲 夫	On the Molecular Formation on Interstellar Grains. (星間ダスト粒子上の分子生成について)
同	石 川 雅 章	Spectrum of the Delta Scuti Variable 20 Canum Venaticorum: A Model-Atmosphere Analysis. (星座デルタ星型変光星獵犬座二十番星のスペクトル: モデル大気分析)
地 球 物 理 学	田 中 高 史	Numerical study of the upper atmosphere. (超高層大気の数値的研究)
同	石 田 瑞 穂	Determination of fault parameters of small earthquake in the Kii peninsula. (紀伊半島の小地震の断層パラメーターの決定)
同	安 藤 雅 孝	Source mechanisms of historical earthquakes along the northern margin of the Philippine sea plate, with special reference to their tectonic significance. (フィリピン海プレート北縁沿いの歴史地震のメカニズムとその地学的意味)
同	本 藏 義 守	Electrical Conductivity Structure beneath the Islands of Japan as revealed by Geomagnetic Variation Anomalies. (地磁気変化異常による日本列島下の電気伝導度構造)

地球物理学	村上 勝人	熱帯擾乱および熱帯・中緯度間相互作用の研究
同	遠藤 昌宏	A Numerical Study of the Variations of Western Boundary Currents by Means of a Two-Dimensional Model. (2次元モデルによる西岸強化流の変動の数値的研究)
化学	野副 尚一	Construction of a High Resolution Auger-Photoelectron Spectrometer and its Application to Surface Phenomena. (高分解能オージェ・光電子分光器の製作およびその表面現象への適用)
同	菅原 正	Synthesis, Reactivity, and Stereochemistry of Polythianes with Electronegative Substituents. (電気陰性基をもつポリチアン類の合成・反応と立体化学)
同	渡辺 和夫	Alkali Metal Intercalation Compounds of Graphite—Their Catalytic, Sorption and Structural Properties. (アルカリ黒鉛層間化合物—その触媒, 気体吸着および構造的性質)
同	川合 知二	Applications of Auger Electron and Energy Loss Spectroscopy to Surface Catalysis. (オージェ電子分光およびエネルギーロス分光法による固体表面触媒反応の研究)
同	中村 幹夫	Restricted Rotation Involving the Tetrahedral Carbon. (四面体状炭素の関与した単結合のまわりの束縛回転)
同	今村 恵子	The Distribution of Tungsten and Molybdenum between Metal, Silicate and Sulphide Phases of Meteorites. (隕石の金属, 珪酸塩, 硫化物相間の, タングステンおよびモリブデンの分配)
同	中川 潤	"Study of Molecular Structures by High-Resolution Infrared Spectroscopy". (高分解能赤外分光法による分子構造の研究)
同	石塚 英弘	NMR Study of Amino Acids and Nucleotides. (NMRによるアミノ酸およびヌクレオチドの研究)
同	滝口 秀樹	Aromatic Substitution by Recoil Tritium Atoms. (反跳トリチウム原子による芳香核置換反応)
同	川島 隆幸	Reactions of Aryliminophosphoranes and 1,3,2,4-Diazadiphosphetidines. (アリールイミノホスホランおよび1,3,2,4-ジアザジホスフェチジンの反応)
同	松本 聰	Spectroscopic Studies on the Triplet States of Some Charge-Transfer Complexes. (電荷移動錯体の三重項状態の分光学的研究)
同	大貫 隆	The stereochemistry of radical addition to the acetylenic bond. (アセチレン結合への遊離基付加の立体化学)
同	磯谷 順一	Study of Hot Ions. (ホットイオンの研究)
同	谷本能文	Spectroscopic Studies on the Triplet States of Aromatic Carbonyl Compounds. (芳香族カルボニル化合物の三重項状態の研究)
同	今野 美知子	Crystallographic Study on the Phase Transition of TCNQ Radical Salts. (テトラシアノキノジメタン陰イオンラジカル塩の相転移に関する結晶学的研究)
同	太田 裕之	炭素—窒素=二重結合系の光化学的挙動
同	多田 全宏	エレモフィラン誘導体の構造と反応
同	永野 肇	Structural Studies on Furanosquiterpenoids in Plants of the Genus Farfugium (Compositae). (キク科ツワブキ属植物のフラノセスキテルペノイドの構造研究)
生物化学	田矢 洋一	転移 RNA 中の微量塩基成分の生合成系酵素に関する研究
同	諸井 将明	Biochemical studies on human α_1 -antitrypsin and fibrin polymerizing reaction. (ヒト・ α_1 -アンチトリプシンおよびフィブリン重合反応に関する生化学的研究)
同	伊藤 繁	Studies on the delayed light emission in spinach chloroplasts. (ホウレンソウ葉緑体の遅延発光の研究)
同	阿部 輝雄	Studies on the axoplasmic transport in the frog sciatic nerve. (蛙の坐骨神経における軸索質輸送の研究)
同	君村 マミ子	Studies on electron transport system of photosynthesis in green plants; Several attempts to determine the sequence of intermediary redox chain with inhibitors or inhibitory treatments of chloroplasts. (緑色植物の光合成電子伝達系の研究, 阻害剤または葉緑体の阻害的処理を用いた光合成電子伝達系内の酸化還元物質の配列順序決定のためのいくつかの試み)

生物化学	池田 稜 衛	枯草菌 RNA ポリメラーゼの研究
同	佐々木 卓 治	Studies on silk fibroin of <i>Bombyx mori</i> directly extracted from the silk gland. (家蚕 (<i>Bombyx mori</i>) 絹糸腺より直接抽出した絹フィブロインの研究)
同	須藤 和 夫	A Study of Collagen—An Approach From Synthetic Peptides— (コラーゲンの研究—合成ペプチドの側面から—)
動物学	松本 明	X線照射を受けたラットの卵巣の異常増殖におよぼす生殖腺刺激ホルモンの役割 (A role of gonadotropins in the abnormal growth of the irradiated ovaries in female rats.)
同	和田 勝	鳥類における視床下部の脳下垂体支配機構
地質学	鹿園 直 建	Chemical environment of the time of formation of hydrothermal vein deposits in Japan, with special reference to Toyoha Pb-Zn vein deposits, Hokkaido. (日本における熱水性鉱床の生成環境、とくに北海道豊羽鉛—亜鉛鉱床について)
鉱物学	藤野 清 志	Cation Distribution and Variation of Local Site Symmetry in Solid Solution Series, $Fe_3O_4-Fe_2TiO_4$. ($Fe_3O_4-Fe_2TiO_4$ 系固溶体における陽イオン分布と局所的なサイトの対称性の変化)
地理学	福原 正 弘	大都市地域構造の研究
相関理化学	青木 貞 雄	X線ホログラフィーによる顕微鏡の研究 (X-Ray Holographic Microscopy)
同	白田 耕 蔵	レーザー励起蛍光による Naz 分子の分光学的研究
同	滝川 忠 宏	高速電子線高分解能エネルギー分析器と銅薄膜の表面プラズモンの研究
同	中村 保 典	Fatty acid synthesis by spinach chloroplasts. (ホウレンソウ葉緑体による脂肪酸合成)
同	實松 敏 夫	α -ヘリックスの NV_1 吸収帯の幅とエキシトン分裂

学部長と理職との交渉

2月18日(月) 12時35分~14時10分

出席者: 学部長, 評議員, 事務長ほか3名, および理職委員長ほか15名。

議事に先だち, 前回問題となった文書回答の件につき理職より経過の説明と, 学部長が一旦回答を承知したの後に後で拒否したのは不可であり, 文書回答を避けるのは無責任であるとの抗議があった。学部長は, 経過はそのとおりだが, 文書質問の内容を見て, これは文書より交渉で話し合う方がよいと判断したと答えた。

1. 白衣支給問題。助手, 臨職にも白衣を貸与する件は, 必要とする研究室が実情に応じて行なうのがよい。
2. 臨職厚生費問題。厚生費の配分の基礎に名目上臨職が算入されないが, 各教室間で実際上大きなアンバランスがあれば正したい。
3. 臨職待遇改善問題。二種の臨職に交通費が支給できないのは遺憾である。
4. その他。一般職員の旅費(理広報5巻6号13頁参照)の件を周知してほしいとの要求, 5号館に関する説明があった。

次回より交渉の議題をもっと早く用意することになった。

(3月の定例交渉記事は, 次号に掲載)

編集後記: “トチノキ” から “ベニシダ” まで11回, 一年間にわたって構内の植物を紹介して頂いた大橋先生の記事は大へん好評で, 広報を片手に, 植物行脚をなさった先生もおられるときいています。本年も是非と考えておりましたが, 先生御自身のお仕事の日程もあり, 残念ながら本号で打切ります。写真その他の面で応援された福田泰二, 黒沢幸子両博士などの御協力をふくめて, 大橋先生に心から御礼申しあげます。

本号は, 恒例により卒業生の名簿を掲載, ささやかな祝意を表しました。また大先輩の茅先生に, 味わい深い文章をお寄せ頂き, 4月号の巻頭を飾ることができました。4月号御執筆の6人の先生方の持味のある文章と併せて, 味読して頂きたいと思います。

編集:

〔小堀 巖 (地理) 理2号館 205号室 内線 6449〕
〔清水 忠雄 (物理) 理1号館 372号室 内線 2783〕